抄　　錄

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose, Bd. 77, H. 2, 1931.

結核菌ノ發育環問題ニ就テ

Møllgaard, Holger (Kopenhagen): Ueber den fraglichen Entwicklungscyclus des Tuberkelbazillus.

牛型及ビ人型ノ Koch 氏抗酸性菌ヲ骨髓血清或ハ高熱デ滅菌シタ醸母越幾斯ニ植エルト先ヅ初メニ一部顆粒狀ヲ呈スル非抗酸性桿菌ヲ生ズル、コノ桿菌ハ初メハ常ニ「グラム」陰性デ普通染色デ染リ難イ。骨髓血清又ハ「グリセリン」ヲ混ゼヌ肉汁デ培養ヲ續ケルト長イ「ヂフテリー」菌型ノ桿菌ニナル、同時ニ顆粒ハ段々「グラム」陽性トナリ大キイモノ及ビ中等大ノモノハ明ラカニ二ツ宛並ビVaudremer, Sweany u. Kahn 等ノ記述シタ雙球菌ト一致スル形トナル。更ニ長ク培養スレバ長絲狀トナリ時トシテハ側枝ヲ出シ放線狀菌樣トナル。以上ノ培養ニ用ヒタ結核菌株ヲ感染サセタ兎及ビ犢ノ肺臟カラハ普通肉汁ニ前ト全ク同樣ナ非抗酸性デ「ヂフテリー」菌型又ハ放線菌型ノモノヲ生ズル。尙又結核犢ノ骨髓カラモ同樣ノ菌ガ發育シタ。肺結核ガ急速ニ進行シテ居ル患者ノ血液ヲ醸母「エキス」ニ培養スルト多數例デハ動物ノ臟器ノ時ト同ジ樣ニ全ク特殊ナ「コリ子」型及ビ放線菌型ノ菌ヲ生ズル。放線菌ハ二種ノ「コニヂエン」卽チ側萠芽及ビ分割芽胞ヲ作ル、側萠芽ハ培養ヲ續ケルト一部ハ雙球菌ノ連鎖トナリ一部ハ長ク「テコリ子」菌種ノ顆粒ノアル桿菌トナル、分割芽胞ハ細長クテ一部ハ充實シ一部ハ顆粒性ノ桿菌又ハ絲狀菌トナル、故ニコノ放線菌ハ芽胞ノ派生ニヨッテ「コリ子」菌形ニ復歸スルノデアル。上述ノ二樣ノ特生芽胞ハ抗酸性ヲ得テ來ル。又雙球菌ハ發芽シテ確實ニ桿菌トナッテ、或ハ「グラム」陰性又ハ陽性、或ハ抗酸性ヲ呈スル。カヽル「グラム」陽性ノ桿菌ヲ「ペトロフ」培地ニ植エルト大多數ハ定型的ナ抗酸性桿菌トナリ Koch 氏結核菌ト區別ノツカナイモノトナル。(柴田抄)

生結核菌ヲ用フル結核症ノ治療ニ就テ

Kutschera, Hans und Aichbergeniwien: Ueber die Behandlung von Tuberkulose mit lebenden Tuberkelbazillen.

第一報、理論的根據及ビ諸家ノ實驗

結核菌ノ感染ヲ受ケタ者ノ運命ハ第一ニ各個人ノ抵抗力ニ關係スルガコノ抵抗力ノ自然的ノ增强ハ生キタ菌ノ作用ニヨッテノミ起ルノデアル、故ニ結核症ニ對スル抵抗ヲ人爲的ニ增强スルニハ人爲的ニ初感染カ又ハ再感染カヲ行フノ外ニハ方法ガ無イ、卽チ生キタ結核菌ノ豫防的又ハ治療的接種ニヨルノ外ハナイノデアル。

諸家ノ經驗ニヨレバ結核症ニアッテハ免疫上效果アル接種材料ハ生キタ菌アルノミデ然モ强毒ナ菌種效果ガ大デアル。然ルニ强毒菌ヲ用ヒタ豫防接種ハ餘リニ危險デアルガ弱毒乃至無毒菌ノ豫防接種ハ餘リニ無效デアルカラ從ッテ豫防接種ノ方法ハ放棄セ子バナラヌ。之レニ反シ治療的ノ注射ハ再感染ハ初感染ヨリモ遙カニ危險ガ少ナイカラ一定ノ注意ノ下ニ行ヘバ生菌ノ治療的接種ハ全然無害ニ遂行シ得ラレル。治療「ワクチン」ノ效果如何ノ問題ハ、コレハ再感染ヲ行フノデアルカラ自然的再感染ヲ研究スレバ明カトナル、自然的再感染ニハ有益ナル影響ト有害ナ影響トアル、通常ハ有害ナ作用ノ方ガ勝ツガ時トシテ自然的ニ適當ナ條件デ起ル場合ハ有益ナ作用ガ勝ツ事ガアル、同樣ニ人爲的ノ再感染ニ於テモ益ト害トノ二作用ガアリ得ル譯デアル。從來行ハレタ實驗ノ成績報告ハ極メテ樂觀的デアルガ詳細ナ臨牀的報告無ク適應症又ハ禁忌等モ分明シテ居ラヌ。

第二報、自家實驗(A. Makitra 共著)

治療例49名デ注射回數400回デアル、菌量ハ0.001瓩ヲ皮內ニ注射ス、間隔ハ平均1週間乃至3週間デ長キ方ヨロシ、症例ハ全然重症患者ノミデアッタニモカヽハラズ一群ノ者ニハ持續的輕快ガ認メラレタ、コノ治療法ノ無效ナルモノハ多量ノ菌ヲ吸入スル事ヲ機械的(例ヘバ氣胸法)ニ防禦シ得ラレヌ場合、及ビ皮膚ガ陰性無反應ヲ呈スル者等デアル。生菌療法ノ危險ニ就テハ從來ノ經驗デハ前ニ感染セルモノニ生菌ヲ皮內ニ注射スルモ菌ノ蔓延スル事ハ全然無シ

トサレテ居ル然シ危險絶無トハ云ハレヌガコノ害ハ生菌ノ蔓延ノ爲デハ無クシテ「ツベルクリン」ノ作用ニ歸セラレル、而シテソノ程度ハ「ツベルクリン」療法ノ時ヨリ小デアリ、又强毒菌デモ强毒菌注射ノ際ニ比シ決シテ强ク無イ。

著者ハ生菌「ワクチン」療法ガアラユル場合ニ何時デモ無害デアルトノ論者ニハ贊同シナイ、特別ノ注意ヲ拂フ事ニヨツテノミ無害ニ行ヘ又一定ノ適應症ニ於テノミ有效デアル、コノ二ツノ前提ノ下ニコノ療法ハ他ノ特殊療法ノ何レヨリモ優越シタ治療的效果ガアルト思フト。 (柴田抄)

結核豫防接種ニ對シテ

Petros, S. A. (Treudean-Sanatorium): Gegen die Tuberkulose-Schützimpfung.

結核豫防接種ニ用ヒラルヽ三種ノ「ワクチン」即チ有毒生菌、加熱死菌、無毒狀態ノ菌ニ關スル注目スベキ最今ノ報告ヲ綜合スルニ、有毒生菌ヲ用フル方法ハ最モ有效デアルラシイガ同時ニ危險デアル、コレハ兩刄ノ刀ノ如キモノデ現今實行ニハ讃同スル事ハ出來ヌ。加熱菌ハ「アレルギー」ヲ生ゼシメルノミナラズ防禦力ヲモ賦與スル、過敏性ガ免疫ノ徴候ダトスレバ加熱菌ハ今少シ多クノ人ニ試用セラレ好イ、而シコノ接種法ニハ絶對的免疫ヲ期待スル事ヲ得ナイ。唯利益トスル點ハ危險ノナイ事デアル。

無毒ノ生菌「ワクチン」殊ニ BCG ニ就テハ著者自身ノ實驗デハ一定度ノ防禦力ヲ與ヘ得ルヲ實證シタガ「モルモット」デハ加熱菌ニヨルヨリモ强力デ無カツタ、猿ニ就テノ實驗成績ハ區々デ全ク免疫力ヲ認メヌ學者モアル。

人間ニ使用スル事ハ漸時ニ擴マリソノ「ワクチン」ノ效果ハ統計ニヨツテ基ヅケラレテ居ル。吾人ハ統計ノ價値ヲ否定ハセヌガ統計ハ「ゴム」紐ノ如ク何方ヘモ引張リ得ルノデ解釋ハ多樣ニ異ナツテ來ルノデアル。更ニ BCG ノ無毒性ヲ考ヘルニ今日思慮アル生物學者デ生物ノ性狀ガ固定シタモノダト信ズル者ハ一人モナイ、生長發育ヲ信ズル以上ハ性質ノ變化ヲモ信ゼネバナラヌ、BCG ハ今日進行性疾患ヲ惹起スル事甚ダ稀ナルハ事實ナランモ毒素ノ產生ニ適スル培地ニ永年培養スレバ再ビ病原性ヲ得テ來ルデアラウ、菌ノ多樣性ト不安定性トヲ思フ時著者ハ生菌ヲ用フルアラユル方法ニ對シ反擊ヲ續ケザルヲ得ナイ。 (柴田抄)

實驗的結核症ニ於ケル脾臟ノ役割ニ就テ

Sarvan, Milivog (Düsseldorf): Ueber die Rolle der Milz bei experimentelln Tuberkulose.

猿ノ脾臟ヲ剔出スルトソノ實驗的結核症ニ如何ナル影響ガアルカヲ觀察シタ。實驗動物及ビ對照各一頭ガ自然ニ斃死シタ、之等動物デハ肺ノ變化ハ兩者同程度デアツタガ腹部臟器デハ脾臟ヲ除カナイ猿ハ結核ノ擴ガリ方ガ强カツタ。他ノ動物ハ同時ニ撲殺シテ検シタ猿ニ於テハ脾臟剔出ヲ行ハナイモノニハ腹部臟器ノ病變ガ强イ事ヲ發見シタ、殊ニ腹膜ノ結核接種ガ認メラレタガ脾臟剔出動物デハ一頭ノ例外ノ他ハ腹膜ノ結核ハ全ク無カツタ、以上ノ事實カラシテ、脾臟剔出ノ刺戟ニ因リ他臟器(或ハ網狀內皮組織)ノ結核菌ニ對スル免疫體產生作用ノ代償的亢進ガ現ハレルノデナイカト思ハレル。 (柴田抄)

猿ノ結核症診斷ノ一方法

Nohlen, Arno u. Sarvan, Milivoy (Düsseldorf) Ueber ein Verfahren zur Diagnostik der Tuberkulose beim Affen.

猿ニ對シテハ「ツベルクリン」檢査法ハ局所及ビ全身反應共ニ從來ノヤリ方デハ用ヲ爲サヌ、稀釋セザル Ophthalmotuberkulin 及ビ舊「ツベルクリン」ヲ混ジタルモノ大量(3.0—5.0瓱)ヲ筋肉內ニ注射スレバ結核猿ハ重イ全身中毒症ヲ起シテ13日ニ死亡スルガ健康獸ハ何等ノ病的反應ヲ現ハサナイ。 (柴田抄)

結核症ノ病理形態所見ニ對スル病原菌量ノ意義

Santo, Erwin (Heidelberg): Ueber die Bedeutung der Virusmenge für das pathomorphologisch Bild der Tuberkulose.

菌量ヲ多クノ階段ニ分ケタ結核菌浮游液ヲ兎ノ角膜ニ注射スルト程度ヲ異ニシタ然シ組織學的ニハ同ジ性質ヲ持ツタ反應ガ現ハレル、尙又「モルモット」ノ皮下ニ種々ノ菌量ヲ注射スルト局所ニ異ナツタ程度ノ變化ヲ生ズル。然ルニ之レ等ト著シク反對ナノハ部位淋巴腺デアツテ此處デハ最小ノ菌量ニ對シテ最大限ノ反應ガ起ル即チ淋巴腺ニ最强ノ反應ヲ起サシメルニハ最少量ノ菌デ充分デアルト結論サレル、然シテ生ズル反應ノ性狀ニ關シテハ菌量ノ多寡ハ直接ノ局所ハ元ヨリ間接ノ個處ニ於テモ影響ハ無イ。肺結核患者30例ニ就テ Butschwitz ノ方法デ病竈ニアル結核菌ノ數量ヲ測定シタ結果ニヨルト病竈ニ於ケル

組織ノ組成竝ビニ廣サト其所ニ存在セル菌數トノ間ニハ何等ノ關係ヲモ認メラレナカツタ。(柴田抄)

肺結核症ノ活動性ニ關スル驗査

Babarczy, M. V. u. Simon, G. u. Martin, A. (Budapest) : Untersuchungen über die Aktivifät der Lungentuberkulose.

赤血球沈降反應、Fornet 氏凝集反應、Matefy 氏反應、Besredka 氏及ビ Neuberg-Klopstock 氏ノ補體結合反應、血球像ノ質的及ビ量的檢査、「ツベルクリン」過敏性ノ測定、以上ノ諸方法ヲ用ヒテ97人ニ就キ試驗シタ。然シテ各法ニツキ陰性ト陽性トガ對照例疑問例竝ニ各病期數例ノ間ニ如何ニ分配サレルカ又肺臟所見ノ變化シタ例デハ反應ガソレニ連レテ如何ニ變ルカヲ觀察シタ。患者ガ「アレルギー」ヲ示シ、「レントゲン」檢査ヲ行ツタナラバ吾人ハ直チニ活動性ノ檢索ニ移ラネバナラヌ、著者ノ經驗デハ活動性結核症ニ對シ陽性診斷ヲ決定サセルモノハ、Fornet 氏ノ凝集反應、100倍以上陽性竝ニ補體結合反應陽性デアル、之レト殆ド同ジ價値ノアルノハ血液像ト沈降反應トガ同時ニ相當スル場合デアリ、血液像ト沈降反應ノ何レカト Météfy 氏反應トガ陽性デアル場合ハ蓋然的徵候デアル。(柴田抄)

肺結核患者ニ於ケル低血壓ニ關スル實驗

Puder, Sándor (Budapest): Untersuchungen über die Hypotonie bei Lungentuberkulose.

重症及ビ中等症ノ結核患者ニ Barath 氏ノ精神的反應試驗ヲ行ヒ、カヽル患者ニハ血壓調整作用ガ弱メラレテ居ル結果トシテ血壓低下反應ガ遲延スルノヲ證明スル事ガ出來タ。一般狀態ノ良好ナ低血壓患者ニテハ人工氣胸ノ爲ニ血壓ノ變化ヲ起サセル事ハ無イ。

「アドレナリン」ノ靜脈內注射ニ對スル感受性ノ低下ハ進行性ノ患者ニアツテハ限局性病變ヲ有スル患者ヨリモ顯著デアル。結核患者デハソノ一般狀態及ビ臨牀所見カラシテ心臟ノ異狀ガ來タトハ考ヘラレヌ樣ナ場合ニモ低血壓ノ症候群ヲ見ル例ガアル、コノ低血壓ハ慢性緩和性ノ虛脫ニヨツテ說明セラレル。(柴田抄)

結核患者ノ白血球像殊ニ「エオジン」嗜好細胞ニ對スル「ホルモン」ノ影響

Oldenburg, Fr. u. Seïsoff, Chr: Hormonale Einflüsse auf das Weiße Blutbild, besonders auf die Eosinophilen bei Tuberkulösen.

結核患者6例ニ就テ「アドレナリン」ノ白血球像ニ及ボス影響ヲ見タガ之レハ健康者ト同樣デ何等新事實ヲ認メナカツタ、次ニ結核患者20名ニ「インシュリン」ヲ注射シ白血球像ヲ檢シタル處ニヨルト白血球全體ハ多クノ例デハ1時間內ニ減少ノ傾向ヲ示シタ然シ之レハ規則的デハナイ、單核細胞モ同樣ニ減少ノ傾向ガ見ラレタ、然ルニ「エオジン」嗜好細胞ハ20例中14例ハ1%以上ヲ增加シ3例ハ約1%增シ3例ハ不明全ク增加セヌモノハ2例ノミデアツタコノ增加ノ頂點ハ多數例デハ注射後30分遲キハ1時間デアル、而シテ1時間後ハ「エオジン」嗜好細胞ハ減少シ始メ注射前以下ニ下ル。コレニヨツテ「インシュリン」ノ白血球ニ及ボス作用ハ「エオジン」嗜好細胞ノ增加ニ認メラルヽモノト信ゼラレル、尙病症トノ關係ハ非活動性患者9名中反應ノ現ハレタ者7、停止性患者8名中同ジク陽性6名弱陽性ノモノ2名、進行性患者3名デハ1名ノミニ「エオジン」嗜好細胞增加ヲ見タ。(柴田抄)

氣腫肺ノ「レントゲン」像及ビ空氣量

Herms, Joachim (Hamburg) : Röntgenbild und Luftgehalt der Lungen beim Emphysem.

肺氣腫ノ「レントゲン」像ハ病的ナ胸廓ノ形ト肺野ノ異狀ナ明ルサトヲ特徵トスル、コノ明ルサハ從來ハ主トシテ氣腫肺ノ空氣ノ容量ノ增大ト組織ノ消耗及ビ肺ノ貧血トデ說明サレテ居ル。然ルニ肺量計デ檢スルト氣腫ノ時ニ全肺活量ハ增大セズ反ツテ多クノモノデハ減少シテ居ル。肺氣腫患者ノ脊柱後彎症ハ胸部ノ厚サヲ增シテ肺野ヲ明ルク見セル一因トナル。又血管影ガ肺氣腫ノ時强ク出ルノハ「コントラスト」ノ爲デアル、肺動脈ノ鬱血ハ底部陰影ノ增强デ示サレル。肺ノ「コントラスト」ガ銳クナルノハ恐ラクハ肺動脈管ノ硬化ニ因ルモノデアラウ。(柴田抄)

「スペイン」ノ喘息ニ就テノ吾等ノ經驗

Jimenèz-Diaz, C. u. Sanchez Cuenca, B. Madrid: Unsere Erfahrungen über Asthma in Spanien.

著者等ハ「スペイン」ニ於テ8240例ノ材料カラ209例卽チ2.5%ノ特發性喘息ヲ見タ、之等ニ就テソノ「アレルゲン」ヲ檢シ外因性ノモノト內因性ノモノトヲ區別シタ、外因性「アレルゲン」デハ花粉96例、住居ノ塵埃11例、氣候關係33例、食物11例デアリ、內因性

ノモノハ46例デアル、著者ハ内因性ノモノニ就キ特ニ之レト肺結核トノ關係ニ言及シテ居ル。(柴田抄)

Zeitschrift für Tuberkulose; Bd 58, H. 3, 1930.

(1)BCG ニ據ル結核豫防注射

Calmette, (A. Paris): Tuberkuloseschutzimpfung („Premunition") mittels BCG.

1930、8月ノールウエー國オスロー市ニ於ケル結核對策國際學會上ノ講演ナリ。第一項ニハ結核免疫ニ關スル從來ノ諸説ヲ綜説シ BCG ニヨリテ免疫狀態ノ生ズルコト、初生兒ノミナラズ。成人ニシテ「ツベルクリン」反應陰性ナルモノニモ使用サル可キコトヲ述ブ。第二項ニハ BCG ヲ得タル由來。動物實驗ニテハ無害ナルコト。腸管ヨリ吸收セラレ1.2ケ月間無害ニテ腸間膜淋巴腺内ニ生棲セル事實等ヲ諸報告ヲ惹ヒテ述ブ。第3項ニハ歐洲各國ニ於テ初生兒ニ實施セル多數ノ報告ヲ綜覧シ、其效果ノ滿足スベキモノナルコトヲ極言セリ。第4項ハ各方面ヨリノ駁論ニ對スル辯明ニシテ、第1ニ經口的ニ與ヘタル小兒ノ一少部分ノミガ、「ツベルクリン」反應陽性トナリ。他ノ多クハ「アレルギー」ヲ起サズ。從テ無效ナリトスル説ニ對シ、免疫ノ獲得ニハ必シモ「アレルギー」ノ生起ヲ要セズ。「ツベルクリン」陰性ナルモ免疫性ノ存在セルコトヲ、諸家ノ報告ヲ揭ゲテ説明セリ。第2ニ BCG ガ人體内ニテ果シテ無害ナリヤ。毒力ヲ變ズルコトナキヤノ疑問ニ對シテ、BCGノ毒力ハ固定セルモノニシテ、人體、動物等ノ體内ヨリ之レヲ培養シ、或ハ動物接種ヲ行フモ毒力ヲ變ゼザルコトヲ力説ス。第3ニ長ク人工培養ヲ續クルトキ BCG ガ免疫發生ノ性能ヲ失フコトナキヤ、ニ關シテハ著者ガ9年間ノ經驗上、變化ナシト答フ。第4ニ BCG ヲ用フルモ猶結核ニ感染シ發病スルコトアルハ如何。トノ問ヒニ對シ、著者ハ經口的ニセヨ、皮下接種ニセヨ。免疫生起ニハ415週間ヲ要ス。故ニ此期間ハ傳染源ヨリ嚴格ニ隔離スルコトヲ要スト答フ。

猶附錄トシテ培養ノ保存、「ワクチン」製法、經口種菌、皮下及皮内注射等ノ方法、種菌者ノ「ツベルクリン」反應等ニ關スル注意ヲ列擧シ、使用者ニ便ニセリ。 (岡抄)

(2)シユロエデル氏「ワクチン」ヲ以テセル肺結核症ノ治療

Brinkmann, R. (Wiedbad): Die Behandlung der Lungentuberkulose mit der Schröderschen Vakzine.

Schröder 氏ノ下ニ於テ成サレタル實驗報告ニシテ、同氏ノ「ワクチン」トハ特殊ナル方法ヲ以テ製セル胸腺「エキス」ニ牛型結核菌ヲ加フルトキハ自家融解作用ニヨリテ菌ハ分解サル。之レヲ注射劑トシテ治療ニ試ミタルモノナリ。初メ菌量0.0025瓩ヨリ、大體3週ノ間隔ヲ以テ注射シ漸次增量シテ0.01又ハ0.02瓩ニ達ス。15例ノ成績ニシテ、何レモ簡單ナル病歴ヲ記載セリ。本療法ハ副作用ナク、注射後2.3日間血液白血球ハ左扁スルモ1.2週ニシテ復舊ス。菌ハ15例中11例喀痰中ニ陽性ナリシガ、其7例ニハ消失セリ。體重ハ他ノ方法ヲ以テセル患者ノ平均增量9.5「ポンド」ナルニ、本療法ヲ行ヘルモノハ平均4.8「ポンド」ナリ。「ツベルクリン」反應及ビ赤血球沈降速度ノ變化ハ不定ナリ。 (岡抄)

(3)肺結核症ノ早期病型ニ就テ

Plieninger, Th. (Scheidegg): Über Frühformen der Lungentuberkulose.

1928—1929ノ患者1347中893ハ古キ治癒セルモノニシテ加療ヲ要セズ。355例ハ進行性ナリ。此内播種甚シキモノヲ除ケル83例ノ「レントゲン」觀察報告ナリ。著者ハ之ヲ4型ニ分テリ。第1型。陳舊結核竈無キ浸潤。22例。内13例ハ13—25歳。鎖骨下浸潤15例。第2型。陳舊結核竈ヲ伴ヘル浸潤。29例。内17例ハ13—25歳。鎖骨下浸潤18例。第3型。浸潤ヨリ發病セリ考ヘラルヽモノ、21例。浸潤ノ他ニ廣ク播種アルモノ。第4型、散在性。卽孤在性病型。11例。平均22.8歳。 (岡抄)

(4)オーストリアニ於ケル現時ノ年齢別結核死亡狀態

Siegfried Rosenfeld. (Wien): Die gegenwärtige Tuberkulosesterblihkeit nach oltersklassen in Österreich.

1926—1927間オーストリア下層階級ノ全結核死ヲ調査シ、之レヲ年齢及性別ニ曲線トシテ考察セルモノナリ、且之レヲ大戰前(1907, 1910, 1913)ノ曲線ト比較セリ。大戰後ノ曲線ハ明カニ結核死ノ減少ヲ示セルモ年齢及性別ニ觀察スルトキ、其曲線ハ互ニ殆ンド竝行セリ。30—60歳間ハ減少最モ著シク男女ノ

曲線ハ反對ノ方向ヲ示セリ、卽男性ニテハ大體50—60歳ヲ頂點トスル增加曲線ナルモ、女性ニテハ大體40—50歳ヲ最少トスル減少曲線ヲ描ケリ。猶著者ハ結核死ノ統計的觀察ニ際シテ、從來ノ一般的顧慮條件ノ他ニ、社會的階級ハ大ナル要素ナルコトヲ注意セリ。 (岡抄)

(5)結核患者住宅保護法ノ豫備案

Dr. Roeder. (Berlin): Etatisierung der Wohnungsfürsorge für Tuberkulose.

ベルリン市廳ハ結核豫防方策ガ從來全然衞生課ノ事業ナリシニ對シ、該事業目的達成ノ爲メニハ開性結核患者ノ住宅衞生ノ重要ナルニ注目シ、住宅問題ノ一部トシテモ取扱フコトニ決シ、其事務所ヲ設置シ、衞生方面ト連絡シテ新タニ標題ノ方法ヲ施行スルコトヽナレリ。 (岡抄)

(6)ポンセ氏「ロイマチス」及播種性肺結核症

Anne-Marie Cohn (Berlin): Poncetscher Rheumatismus und generalisierte Lungentuberkulose.

30歳ノ婦人ニ見タル本症ノ1例報告ニシテ Kubierschky 擧ゲタル本症ノ特徵。1.「サリチール」酸劑ノ無效。2. 心內膜炎無キ事。3. 他ニ結核性病變ノ存在。4.「ツベルクリン」反應ノ陽性。5. 動物實驗ノ陽性。6. 關節穿刺液ノ單核細胞ヲ主トスルコトノ他。猶 Ruescher 等ノ唱フル亞急性或ハ慢性經過ノ下ニ關節ノ强直ヲ來ス特徵等ニ關シテ考察セリ。本例ハ全身諸關節ニ始メハ急性ニ、後慢性經過ノ下ニ甚シキ疼痛ト强直トヲ來シ、關節ニ滲出液ナク、從テ上記ノ5及6ヲ缺クモ、同時ニ肺ニ結核症播種ヲ來セルニヨリテ其結核性ナルコトヲ決論セリ。 (岡抄)

(7)結核菌其他ノ菌ニ對スル「ヨヂピン」ノ殺菌作用ニ就テ

Amako, T. H. (Berlin): Über die bakterizide Wirkung des Jodipins gegenuber Tuberkelbazillen und anderen Bakterien

試驗管內實驗ニシテ、Jodipin (20%) ノ對照トシテ胡麻油、「ケシ」油、「クレゾール」石鹼液(1%)、「グリセリン、ブイヨン」、蒸餾水、生理的食鹽水ヲ用ヒタリ。是等ノ液ニ觸レシメタル時間ハ3/4. 2. 4. 22 1/2. 70. 94時間ナリ。結核菌以外ノ菌トシテハ Bac. pyocyaneus, 葡萄狀球菌(aureus)、溶血性連鎖狀球菌、普通大腸菌ヲ用ヒタリ。其結果20% Jodipin ハ結核菌ニ對シテ殺菌作用ナシ。但シ若キ培養菌ハ古キモノヨリモ抵抗多シ。其他ノ菌ニ對シテハ數時間後ニ至リテ死滅セシム。故ニ實際問題トシテハ Jodipin ノ自家淨化作用ニノミ頼ル能ハズトセリ。本實驗ハ油胸ノ考察ノ一部トシテ行ハレタルモノナリ。(岡抄)

(8)家兎ノ結核感染實驗ノ經過中微量赤血球沈降速度計測法ハ如何ナル程度迄應用シ得ベキカ?

Georg Lindemann, (Bonn): Inwieweit lässt sich die Mikro-Senkungsreaktion im Verlauf der tuberkulösen Infektion des Kaninchens verwenden ?

Selter 敎授ノ下ニ行ハレタル實驗的結核家兎ノ結核症ノ經過中赤血球沈降速度ヲ通常用ヒラルヽ大量(Westergren ? 法記載ヲ缺ク)ト Langer-Schmidt 氏微量法(Z. Kinderheilk. 1926, Bd. 41) トヲ對比シテ其價値ニ就テ比較試驗ヲ行ヘルモノナリ。一部家兎ニ於テハ病竈ヲ摘出治癒セシメテ其速度ノ變化ヲ追ヘリ。本實驗成績ニヨレバ、微量法ハ實驗動物ヲ弱ラシムルコトナク、大量法ト同樣ノ成績ヲ示シ、使用ノ目的ニ適ヘルコトヲ示セリ。猶病竈摘出後直チニ「ツベルクリン」ヲ注射セルニ沈降速度ニ何等ノ影響ヲ示サヾリシト云フ。 (岡抄)

The American Review of Tuberculosis. No. 3, Vol. XXIV, September, 1931.

弱結核症

Goldberg, B. and Gasul, B. M.: Epituberculosis.

弱結核症ノ少數例ナレドモ定型的ノ普通ノ經過ヲトレル者ヲ報告說明セリ 卽 Eliasberg u. Neuland ノ型ノモノナリ然シテソノ「ツベルクリン」反應ハ局所及周圍及全身的反應共ニ特有ナル性質ヲ示セリト。

(太田抄)

人工氣胸術ノ「キモグラフォオン」描寫ニ就テ

Paul Iufault: Kymographic tracings inartificial Pneumothorax.

著者ハ人工氣胸術ヲ行ヒ胸腔內ノ壓ヲ「キモグラフキオン」ヲ用ヒテ描寫セシメタリ、然ルニ其結果コノ曲線ハ非常ニ多樣ナ型ヲ示スモノナルコトヲ知レリ、然シテ著者ハ水「マノメーター」ヲ用ヒテ讀ミテ完全

ニシ微動ナル內壓ノ變化モ之ニ表ハルヽ樣ニセリ、描寫セラルヽ處ニヨレバ普通中和壓ノ時ハ陰壓ノ時ヨリモ高シ部分的氣胸ニテハ肺臟ノ移動ヲ詳カニソノ實相ヲ確カメ得ズ然シコノ描寫ニヨレバ高壓ハドチラニセヨ患者ノ普通ノ經過ニ於テハ好マシカラズト云フコトヲ原則トシテ確言シ得。 (太田抄)

姙娠ト分娩後兩側橫隔膜神經捻除術ノ經過

Arthur W. Puryea: Pregnancy and bilateral Phrenic Exairesis Postpartum.

26歲ノ妊婦婦人ノ3ヶ月ニ於テ兩側性人工氣胸ヲ施シ後ニ症候的快癒ヲ得シヨリ、然シテ妊娠ノ後期ニイタリテ橫隔膜捻除術ヲ行フ、勿論腹部胎兒ニハ充分ナル注意ヲ以テシテ分娩ヲオウルコトニ成功セリ分娩後モ結核ニ於テ何等ノ增惡ヲ見ズト。(太田抄)

結核性膿胸ニ於ケル「ゴメノール」使用ニ就テ

Willard J. Davies; Use of Gomenol in Tuberculosis-Empyema.

人工氣胸術後膿胸ヲオコスモノ多シ之ニ油胸ヲ施シ5%位ノ「ゴメノール」ヲ混ゼリ、5例ニ行ヒ1例ハ結核性腦膜炎ナリ中3例ハ治癒シ1例ハ進行セリ治療ヲ中止ス、腦膜炎ノモノハ死亡セリ。(太田抄)

塊狀無氣肺ノ原因及其機構

E. Kobal; The Aetiology and Mechanicus of Massive Atelektasis.

長期間ノ背臥ニ於テ無氣肺ガ其部ノ通氣ノ尠少及橫隔膜ノ無動ノ何等ノ原因ニヨリテ成生セラルヽコトアリ。又側位臥ニテモ壓縮セラルヽ側ノ無氣ヲオコス、卽壓縮セラルヽ半側胸ガ壓セラレ橫隔膜モ下半分ハ無動トナル。又肺及腹部ノ外科的手術ニテ呼吸ニ關スル筋肉ガ傷ケラルヽ場合ハ呼吸能率ヲ減ズル、長キ氣管ノ閉塞ハ無氣肺ヲ全クオコサズト。(太田抄)

診斷ニ於ケル補助的舊「ツベルクリン」皮下注射

I. Steidl and F. H. Heise: Old Tuberculin Administerd Subcutaneously, for Diagnosis.

著者ハ症候不明ナルカ又ハレ線學上不明ナル患者ニ診斷補助トシテ419例ニ0.01ccノ舊「ツベルクリン」皮下注射ヲ行ヘリ、然シテ嘗テ感染アリシ者ニテハ大部分ガ此方法ニテ陽性ヲ示シ、全身及局所的反應ヲ示サヾルモノ5.55%シカナシ、然シテ局所反應ノミヲ示セル者ノ13.8%ガ試驗後再發シ、全身症候ノミヲ示セル者ノ19.7%ハ結核ヲ起セリ。(太田抄)

一般人口ノ結核死亡率ヘノ世界戰役ノ影響

W. W. Lee: The Iufluence of the World War on the Tuberculous Mortalityin Civilian Population.

戰爭ノ影響ニヨル結核死亡率ニ於テハ獨逸及アメリカ合衆國ノ統計ヲ基トシテ1900年ヨリ1928年ノ間ノ成績ヲ基トシテ研セリ。

アメリカ合衆國ノ死亡率ハ戰爭中ハ少ク戰後急ニ下リ20%ニ迄及ベリ、然ルニ獨逸ニ於テハ1918年ニ55%モ、アメリカヲ超過セリ。戰後モ1921年迄急ニ下リ、1922—1923年ハ財政危機ニアタリテ、アメリカノ1923年度ヨリモ62%モ多シ、1923年後ハ1927年イタリテ戰前迄ニナレリ、獨逸ノ1918年ノ衰微ハ産業ノ減退及財政上ノ悲境ニ一致セリ、1923年ハ獨ノ「マルク」ノ低落ニ一致セリ。 (太田抄)

腦ニ於ケル結核性膿瘍

G. F. Evans, C. E. Smith: Tuberculosis Abscess of the Brain.

14歲ノ少女ニ於ケル腦ノ結核性膿瘍ヲ發表セリ、然モ其病理解剖的剖檢ニ於テモ明カニ腦ノ結核性膿瘍ノ診斷ナリ、Arnold 及 Gardner 兩氏ノ說ヲ說明シ結局此例ハ肺臟及皮膚ノ結核ノ轉移ナラントト結論セリ。 (太田抄)

肺結核ニ於ケル溶解性及不溶解性「カルシウム」ノ分類

F. B. Cooper: The Distribution of Diffusible and Nondiffusible Calcium in Pulmonary Tuberculosis.

22例ノ選擇セザル10例ハ浸出性12例ハ增殖性ナル患者ニ於テソノ血淸ニ溶解性ナルカ不溶解性ナルカニヨリテ之ヲ區別セリ、之ニハ Greenberg u. Clark ノ方法ニテ血淸內ニ殘ルカ溶解スルカニテ決定セリ、之ニテ何等ノ病型及病期ニ關シテ云フ可キコトナシ。 (太田抄)

結核診斷上ノ海猽注射ノ確實性

W. H. Feldman, C. E. Smith: The Reliability of Guinea-Pig Inoculotion in the Diagnosis of Tuberculosis.

著者ハ158例ノ患者ヨリ材料ヲトリ導尿セル尿ノ125ノ標本胸隔ヨリトレル12ノ標本及樣々ノ組織及液體標本11ヲトレリ、之ヲ各2區ノ海猽ニ1ハ皮下1ハ腹膜內ニ注射セリ、然シテ其中21例ハ重キ結核ナリ、卽海猽ヲ數週後ニ殺シ其脾臟及肝臟ヲトリテ組織標

本ヲ作リ檢鏡セリ。 (太田抄)

國立結核學會ノ第27回例會ニ於ケル會長演説

H. Boswell: Address of the President.

此國立結核學會ガ今日迄ナシ來レル種々ノ社會的業績ニ就テ説キ將來尙學術研究業績ヲ盛ニセザル可ラザルコトヲ述ベ加フルニアメリカノ小兒ノ結核問題ニ言及シ之ガ結核撲滅ニ努力スベキヲ述ベタリ。

(太田抄)

肋膜腔內肺臟剝離ニ就テ

B. Noland Corter: Intrapleural Pneumolysis

著者ハ開放性肺臟剝離術ニ就テ記載シ5例ノ此方法ガ成功セシ例ヲ報告セリ、然シテ其後結果開放性肺臟剝離ハ廣汎ナル帶狀及又厚キ又ハ丸形ナル癒著ヲナセル患者ニ於テハ適當ナルモノナリ、閉塞性剝離術ハカヽル癒著性患者ニテハ困難ニシテ成功スルコト尠シ然モ閉塞性ノモノハ開放性手術ノ側トシテヨリ安全ニ剝離シ得故ニ著者ハ厚キ癒著アル患者ニテハ閉塞性手術ヨリモ開放性手術ノ方ヲ推賞ス。

(太田抄)

便利ナル携帶用人工氣胸術器械

Chavles habliston: Convenient Portable Artificial Pneumothorax Apparatus

著者ハ輕便ナル携帶用人工氣胸器械ヲ考ヘ發表セリ重量2.5傍位、空氣量50c.c.ニテ二連球ヲ附シタリ。

(太田抄)

同時性兩側性人工氣胸術ニ就テ

Jacob Kaninsky · A Noton Simultaneous Bilateral Artificial Pneumothorax.

同時性兩側性人工氣胸ノ例ハアメリカ臨牀家ニハ尠シ著者モ2例ノミナレバ之ニ對シ充分ナル批判ヲナシ得ズ然シテ1側性ニ比シ兩側性氣胸モ決シテ豫後不良ナリトハ考ヘラレズト2例ノ實驗例ヲアゲ説明セリ。 (太田抄)

肋膜腔內肺臟剝離術ニ就テ

Lincoln fisher: Intrapleural Pneumolysis.

Wanenley Hills Sanatorium ニ於テ1930年7月ニナセル人工氣胸術中28.6%(16例)ガ、燒灼術ニ適應セリ。卽20例ノ中胸腔鏡視ヲナシ得シモノ18例、17例ニ剝離術ヲナシ得、16例ニ成功セリ、1例ハ全ク燒灼不可能ナリ、又全患者中主感的ニモ客感的ニモ全ク成功セルハ2例ノミナリ、大部分ハ鏡視上壓縮セラルヽ樣ニ見エ又ハ症狀ノミ消失セルノミ又ハ腔洞ノミガ壓縮セラレシモノナリ、腔洞ノ壓縮ハ一方ノドチラカラ壓縮セラレテ縮マレリ、卽他側ヨリ壓縮セラレシモノハ肺臟ノ移動ニヨリテ他側ヲ壓縮セラレシナリ、大部分ノ患者ハ喀痰菌ハ陰性ニナルモノ多ク時ニ中等度ノモノアリ、然シ「ガフキー」表ノ順位ハ少クナル喀痰、咳嗽ノ量ハ少量ニナル卽部分的腔洞ノミノ壓縮ニテモ症狀ハ著シク良好トナル、又肺臟以外ノ合併症モ亦虛脫療法ニテ良好ニナル傾向アリ。 (太田抄)

Dallas 結核學會ノ夏期「キャンプ」ニ就テ

R. M. Smith: The Summer Rest Camp of the Dallas Tuberculosis.

Bachmans'lahe Dallas Texas ニ於ケル夏期「キャムプ」ガ Dallas 結核學會ニヨリテ催サレタリ、夏期3ヶ月間ヲ行ヒステニ12年間ヲ續ケタリ、小兒數ハ250名ニテ之ニX線檢査又ハ「ツベルクリン」檢査ヲナセリ、然シテ是等ノ成績ヲ簡單ニ報告シ又兒童ノ榮養體重等ニ於テ記載セリ詳細ハ略ス。(太田抄)

結核菌純培養中成長草履蟲類ノ實驗

A. P. Damerow: An Attempt to Grow Paramoeciain Pure Cultunes of Tubercule Bacilli

結核菌肉汁培養器中ニテ草履蟲ハソノ生長及生殖ヲ與ヘ得ズ、叉草履蟲ノ發育能力ノ試驗ハ結核菌ニテハ不成功ナリ又結核菌ハ速カニ草履蟲カラ洗ヒ去ラレ又2週間後ニハ之密著ス、オソラクハ結核菌ハ草履蟲ノ原形質中ニ取込マルナラント。(太田抄)

喀痰中結核菌ノ融解

L. Rosenthal and V. B. Dolgopol: Lysis of Tubercle Bacilli in Sputum.

喀痰檢査前數日間放置スル時ハ結核菌ハ自然ニ融解ス、室溫中ニテ或程度迄ノ融解ハ必ズオコル、48度—60度ガ最モ著明ノ融解ヲナス、然シテ之ハ菌ノ融解セシムル分質ハ白血球ノ自家融解產物ナラント。

(太田抄)

人類結核ノ流行病學上ノ不感受能力ニ就テ

H. W. Hill: Insusceptible Strains in the Epidemiologie of Human Tuberculosis.

著者ハ近頃ノ業績ニヨリテ植物及冷血動物鳥類又ハ黑人等ノ間ニ先天性抵抗力ヲ傳染病ニ對シテ保有スル者アルコトヨリ結核ニ對シ白人間ニテモ之ヲ存スルト云フ假説ヲ説明シ白人間ニ於ケル結核ガ決シテカヽル假説ヲ立證シ得ザルコトヲ説明セリ。(太田抄)

會報竝雜報

○一月中入會者

望月　勇	靜岡縣庵原部小島村字但沼 519	松原謹一	靜岡市西深草町
山口要道	大阪市南區天王寺堂ヶ芝町住吉病院內	中村　嚴	小倉市記念病院內
		田中　忠	東京市外小松川町字下平井 2.026
三神　壽	東京府下野方町東京市療養所內	西村英男	大阪市梅田阪急百貨店醫務室

○會員ノ訃

右記會員ノ訃報ニ接ス謹シテ弔意ヲ表ス　　星野鐵男

○第十同日本結核病學會總會

既ニ本誌ニ廣告セシガ如ク本會總會ハ 4 月 1、2、3 日名古屋市ニ於テ開催シ，3 日午後ハ各學會合同ノ會員懇親會トシテ「日本ライン下リ」ヲナシ次デ犬山ニ於テ宴會ヲ催ス豫定ナリ。

評議員會ハ 4 月 1 日正午ヨリ名古屋市公會堂ニ於テ開催ス。

○コッホ博士記念祭

日本結核豫防協會竝ニ日本結核病學會主催ノコッホ氏記念祭ハ大體左記ノ次第ニテ擧行スル豫定ナリ。

會　場　日比谷市政會館

時　日　3 月 24 日午後 1 時半開會

記念式次第　午後 1 時半開會

開會ノ辭

日本結核豫防協會　理事長　金杉　英五郎

結核豫防資金贈呈

日本結核豫防協會　會頭　德川　公爵

受領之辭　獨逸大使

祝　辭　內務大臣

祝　辭　文部大臣

休憩 30 分間(來賓及會員喫茶)

午後 3 時ヨリ記念講演會、座長　岡田　淸三郎

講演(結核菌發見以來 50 年間ノ進步)

一、細菌學方面　醫學博士　佐藤　秀三

一、臨牀學方面　同　遠藤　繁淸

一、豫防事業方面　同　高野　六郎

閉會ノ辭

日本結核病學會　會長　岡田　淸三郎

第九卷第十二號淸水義壽論文正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
1658	6	試驗獸中	試驗時中	1664	11	炭素	(不用)
1659	10	斃死セシムルナリ	斃死セシムルモノナリ	1665	14	氣管枝炎竈	氣管枝肺炎竈
1665	1	淋巴腔內細胞	淋巴腔內皮細胞	,,	20	大理石斑點	大理石樣斑點
1668	3	第39號ニ於テハ45日	第39號ニ於テハ40日	1669	5	網狀織內被細胞	網狀織內皮細胞
1682	2	而シテ其他	而シテ其後	1670	21	纖維化變化	纖維性變化
,,	18 20	結核免疫(過敏性)	結核免疫(過敏)性	1671	2	顎腺	頸腺
1683	4	豫防ノ肺結核ノ	豫防ハ肺結核ノ	,,	18	罌粥粒大	罌粟粒大
,,	23	第3卷第1號	第30卷第10號	1673	22	中心部旣壞死	中心部旣ニ壞死
1686	4	各群二類宛ヲ	各群二頭宛ヲ	1674	1	酪變竈ニ形成ス	酪變竈ヲ形成ス
,,	6	殘リノ一頭ヲ	殘リノ一頭ノ	,,	,,	外居	外層
1687	4	檢索スルヲ注意トシ	檢索スルヲ主意トシ	,,	8	瀰蔓細胞	瀰蔓性細胞
1689	21	血管周圍ニ多少ノ	血管周圍ニ多數ノ	,,	12	灰白癒合セル	灰白色癒合セル
1690	6	腋窩及ビ腸間膜腺	腋窩腺及ビ腸間膜腺	1675	20	深頸腺左右腺	深頸腺左右兩腺
,,	,,	淋巴竈擴大シ	淋巴竇擴大シ	1676	2	其他ノ內臟變著ナシ	其他ノ內臟著變ナシ
1707	13	肺胞ノ數十倍ニ相常ス	肺胞ノ數十倍ニ相當ス	1678	23	旣ニ酪變ニ陷ルル	旣ニ酪變ニ陷レル
1711	7	免疫群ハ健康獸ニ比シ	免疫獸群ハ健康獸群ニ比シ	1679	11	島嶼狀	嶋嶼狀
,,	20	運度ニ關スル	速度ニ關スル	,,	23	肝臟邊緣厚大部分	肝臟邊緣鈍厚大部分
1664	2	健康海猽肉眼的	健康海猽ノ肉眼的	1680	1	其地充血高度ナリ	其他充血高度ナリ
,,	8	氣管枝炎竈	氣管枝肺炎竈				

結核第十卷第一號平澤論文正誤

頁	段	行	誤	正
5	1	11	測ルモノハ	測レルモノハ
		35	爭闘相、Kampfphase	爭闘相 Kampfphase
6	2	16	至ルハ	至ルニハ
		27	著明ナル	著明ナルハ
8	2	11	豫後至好	豫後頁好
9	1	15	服歸	復歸
		25	照射適應ニ當	照射適應ニ當リ
第2表　不變ノ計			35.6%	53.6%
第4表　減少			8.2%	8.3%
第8表　營養頁好ナリシモノノ增加			14	15
第15表　消失減少ノ計			83.09%	83.0%
第19表　第三期健存ノ計			1.1%	18.1%
,,　不變ノ不明			5	9
第20表　著效			42.8%	42.9%
附表　1914—1923ノ對照			37　34.0%	40　10.9%
			19　17.4	23　6.3
			43　39.4	282　77.0
			10　9.2	21　5.8
第23表　增惡ノ不明			0	4
第24表　乾性肋膜炎ノ不變ノ結核死			0	1
癒著肥厚性ノモノノ著效			13例	12例
第31表　計			25例	46例
第34表　調査年時ニ相當欄			31	'31